

激動の経営

誠実に取り組む

2008年10月に民事再生法の手続きを行なった新井組。以前から稼働中の官庁工事を除いて仕事はゼロになった。そんな中、地元兵庫県得意先から

新井組

④

「地元の復興や発展を支えてくれた。新井組さんだから」と少しずつ仕事を請け負った。

現社長の馬場公勝は当時、「もう一度、人が嫌がる仕事からやろう」と東京の社員に呼びかけ、下水道の開削や電線の地中化工事を積極的に請けた。それは周囲から頼られ、建設業に誠実に取り組んできた企業らしい復活の道筋となった。そして11年7月、1年前倒しで民事再生手続きを完了させる。

社員が幸福になる会社



震災経験生かす
同社が再建に邁進していた11年3月、くもも東日本大震災が起ころ。震災を経験した社員たちは建設業の使命を強く感じた。工事部長の馬場は上司らと3月11日の地震後、即座に東北に向かい、現地を視察。仙台と岩手に営業所を開設した。すぐに営業所を構えたものの、東北での実績が長年なく、入札で49連敗した。しかし、馬場が昔付き合いのあった地元企業と再会

▲新井組が手がけた三陸沿岸道路の唐桑地区道路(同社提供)

内容で日本一の会社に

し、協力して橋梁の下部工事の受注に成功した。これが実績になった。こうして新井組は東北を縦断する復興道路「三陸沿岸道路」の建設を支えた。各現場では近隣住民の工事への理解を得ることが重要であった。多くの社員は阪神淡路大震災で被災した経験があった。社員は被災者である東北の住民に誠心誠意寄り添うことで理解を得た。地元で震災経験がある社員だからこそできる姿勢だった。工事成績評定では、全42件の復興事業で平均80点という好成績を記録。工事の質や住民への配慮が考慮された結果だ。

こうして信頼と実績を積んだ同社は、再建ではなく発展期に移った。14年には一度手放した本社ビル(兵庫県西宮市)を買い戻し、成長を確かなものにした。

堅実な成長

震災経験を生かして開発した耐震補強工法の普及や産学官連携による新規事業の立ち上げに挑戦しながら堅実な成長を掲げる。「新井組は内容において日本一の会社を目指す」と馬場と宣言する。

顧客満足度を高め、得意先や協力会社から頼られる企業を目指す。さらに続けて、「社員が幸福になる会社」の重要性を語る。それは「建設事業を通じた社会貢献」を望む社員一人ひとりを大切にしたいから。馬場は機会があれば「誠心誠意打ち込むことで、道は開ける」と社員に説く。

3代目社長の新井辰一が制定した経営理念を馬場の言葉で継承し、社員の自己実現を果たす企業に向かっています。(この項おわり。神戸・会津陸人が担当しました)